

【共同研究報告】

基幹共同研究・コンタクト・ゾーンとしての現代ファッション

国際ファッション専門職大学

田中雅一

本研究は、現代ファッションをさまざまな接触領域（コンタクト・ゾーン）と捉えることで、これまで見過ごされてきたファッションの可能性について総合的な観点から考察することを目的とするものである。メンバーは、学内共同研究員として田中雅一（代表）、金谷美和、小山有子、丹羽朋子、学内の研究協力者として平井秀樹、学外の研究協力者として高馬京子（明治大学准教授）、宮脇千絵（南山大学准教授）、蘆田裕史（京都精華大学准教授）の合計8名からなる。

2年目であった2020年度は、新型コロナウイルス感染症拡大のために、当初予定していた2つのシンポジウムが中止となってしまった。しかし、現代ファッションの接触領域を広く渉猟するために、研究会メンバーを中心に研究会を重ね、その成果を現代ファッション特別セミナーとして公開し、学内で共有することにつとめた。

本年度は、3回の共同研究会議、4回の現代ファッション特別セミナー、1回の現地調査を行うことができた。現代ファッション特別セミナーは、オンラインを活用して、3キャンパス同時開催で行い、学内に参加者をつのって開催した。

本年度の活動により、現代ファッションにかかわる接触領域について、十分に議論を重ねることができ、次年度に開催予定のシンポジウムの構想につなげることができた。

【現代ファッション特別セミナー】

第6回 小野原教子氏（兵庫県立大学）

「服も言葉も——奥行きファッション論へ」

（2020年8月5日 オンライン）

第7回 三谷武氏（MITTAN デザイナー）

「産地との協業、継続的な服作り」

（2020年12月2日 大阪校とオンラインとの併用）

第8回 池上慶行氏（倉敷地域おこし協力隊）

「繊維産地でうごきまわる

——フィールドワークから、仕事をつくる」

（2020年12月15日 大阪校とオンラインとの併用）

第9回 小田亮氏（元首都大学東京教授）

「スマイルズという会社の人類学

——システムの中のコモン・ネットワーク」

コメンテーター比嘉夏子氏（北陸先端科学技術大学院大学）

現代人類学研究会との共催

（2021年2月13日 オンライン）

【現地調査】

第3回 倉敷市児島のジーンズ生産工場見学、生産者との面談

（2021年2月21日～23日 岡山県倉敷市）

静岡県天龍社繊維産地における 別珍・コール天生地製造関連企業の研究

国際ファッション専門職大学

篠原航平

天龍社繊維産地は、静岡県の旧福田町を中心とする三市一郡（磐田市・掛川市・袋井市・周智郡）の織物製造関連企業を中心に構成されており、国内で唯一の別珍・コール天（コーデロイ）の生産地である。国内生産のシェアは95%以上となる¹⁾。しかし、別珍・コール天生地は元より季節性があり、トレンドの影響も受けやすい。さらにアパレル品の海外生産へのシフト、近年のアパレル不況、そしてそれらに追い討ちをかけた新型コロナウイルス感染症による小売店の休業や消費の減退により、同産地の別珍・コール天産業は大きな影響を受けている。

別珍・コール天は①荒巻（整経）、②サイジング、③経通し、④織布、⑤剪毛（別珍）・カッチング（コール天）、⑥仕上げ（毛焼き）、⑦染色整理を経て生産される。日本の繊維産業は分業化が進んでおり、①～⑦は天龍社繊維産地においても、それぞれを専業とする企業が担っている。多くの製造工程は異なる種類の生地生産に転用することができる。しかし⑤剪毛（別珍）・カッチング（コール天）、⑥仕上げ（毛焼き）は別珍・コール天の独自工程であり、他の生地の生産で使用することはない。天龍社繊維産地の衰退により、今後もし剪毛（別珍）・カッチング（コール天）、仕上げ（毛焼き）工程がなくなるようなことが起これば、日本産の別珍・コール天は消滅してしまう。

本稿ではコール天製造関連企業の状況が把握できたので簡単に発表したい。2020年時

点で、コール天の独自工程であるカッチングは4社、仕上げに至っては1社のみである。カッチングの1社と仕上げの1社は事業承継が済み、それぞれ40代と50代の経営者である。現在のコール天産業は、生産面を取りまとめているのが同産地を拠点とする1社の産元商社である。金額ベースでコール天の60～70%の生産に関しては同社が関与していると考えられる。全国の繊維商社・生地商・アパレルなどからコール天の受注をまとめ、天龍社繊維産地に発注をかけるのは県内の1社の産元商社と他県を拠点とする1社の繊維商社が中心と考えられる。両社それぞれ金額ベースでコール天の20%程度（2社合計約40%）を取りまとめていると考えられる。

また、前述の他県を拠点とする繊維商社によると、同社は現在コール天の約25%を生機で中国から輸入しているという。つまり①荒巻（整経）～⑥仕上げ（毛焼き）までの工程が海外で処理されているということである。アパレル品の生産が海外にシフトしただけでなく、生地として価格競争力のある海外製品が天龍社繊維産地に流入し、コール天産業の疲弊を加速していると考えられる。

<注>

1) 天龍社織物工業協同組合「主要活動・業界の現状・イベントの案内」

<http://www.siz-sba.or.jp/tenryu/katudou.htm>（2021年7月7日閲覧）。

東海地域における養蚕業の再興に関する学際的研究

国際ファッション専門職大学

高間由美子

今年度は前年度の調査を踏まえ、伝統産業のあり様を理解することを目的とした。これまでの調査を通して、①地域産業の活性化、②産学共同のコラボレーション、③商品化の機会、④産業、伝統、文化の理解、⑤素材、技術、デザインの創造などに取り組んだ。そして、商品化と市場の確保を行うことがこの地域の伝統産業の再興にもつながると考えた。東海地域の養蚕業の現況を理解したうえで、東海地域の異種産業におけるアイデアや成果についてのセミナーを計画し、それを参考にして養蚕業の再興の兆しとなるアイデア商品を考えることを狙った。そしてシルクを素材とした商品をこの地域の生活のなかに生かす方法を見出す一助とした。

先ず、計画したセミナーへ学生も参加させ我々の研究内容の調査報告を事前説明会とした。その後、第2回、第3回は東海地域の伝統産業の異業種分野において精力的に活躍されている専門分野の方々から企業の考え方、商品化へのヒント、製品のノウハウを学ぶ機会にした。そして伝統産業、伝統工芸であるシルク製品の商品化に向け創造的な着想のアイデアを形にするための知識や方法論を学んだ。その後、シルクを用いた商品アイデアや企画力を問うための選考会を行った。第4回はプレゼンテーション会と称し、最終選考に残った学生が発表を行った。講師であった審査員からの講評もいただき、学生は着想から企画立案に至る過程までを経験す

る良い機会となった。

こうした一連のプロセスを通じて、東海地域の伝統産業への理解、興味が深まった。共同研究メンバーにとって、東海地域の異業種との取り組みを知ることは、シルクと異業種を融合させた新たな商品アイデアを考えるきっかけにもなる。また、名古屋キャンパスでは地場産業を重視しており、本学主導で産学連携の取り組みがなされたことは貴重な第一歩と言える。本研究は地域の強みを生かした雇用機会と商業機会双方の創出への道筋を提供するという可能性をもって進めており、東海地域の伝統産業と地方の文化の再興を通すことで養蚕および地域の活性化に必要なアイデアを還元できるという社会的意義を引き続き果たしていく。

学内セミナー開催内容は、第1回：『事前説明会』2020年10月29日（木）、第2回：『歴史に学び、未来を思考、創造する～素材・技術・デザイン～』11月28日（土）、第3回：『デザインコンテスト説明、企業説明』12月3日（木）、第4回：『プレゼンテーション会』2021年2月10日（水）、第5回：『審査発表会』2021年2月20日（土）であった。

これらの取り組みは、東海地区の養蚕農家の現況、伝統産業、地域産業へのモノづくりを通じた異業種連携にもなる。また、セミナーへの講師依頼がきっかけとなり、臨地実習Ⅱの受け入れ先企業が開拓された。

SDGs と大阪・関西万博、ファッションにできることは

国際ファッション専門職大学
富澤修身

2019年度から3カ年計画の本共同研究のテーマは、「SDGs と大阪・関西万博、ファッションにできることは」であり、大阪産学連携研究会を組織して実施している。

ここ数年ファッション及びファッション産業に対する風当たりがかなり強くなっており、これまでのあり方を変えない限り、生き残れないところまで追い込まれているという現実があり、他方で新しいプレーヤーと新しいビジネスモデルも生まれつつある。こうした状況は2015年9月に国連で採択されたSDGs（持続可能な開発目標）と多に関連していることは言うまでもない。それゆえ共同研究でSDGs達成に関わってファッションにできることは、と問うことにした。

他方でSDGsと関わっている2025年開催の万博も、大阪ファッションクリエイション・ビジネス学科の所在地大阪で行われる以上、無関心ではいられなかった。それゆえ、共同研究で大阪・関西万博に関わりファッションにできることは、と問うことにした。

3カ年計画の2年目に当たる2020年度は、前年度の成果を踏まえてSDGs達成に積極的なファッション関連企業への訪問調査を計画していた。しかし、新型コロナウイルス禍と緊急事態宣言の2度の発出により、対面調査は不可能となった。また、大学の授業が未経験の遠隔授業となり、これへの対応のため2020年度前期の共同研究は滞った。こうした中で8月28日に関西ファッション連合のSDGsに関わる新しい取り組みについての聞き取りを皮切りに、研究活動を開始した。しかし、やはり対面調査が困難であることには変わりなく、ウェブサイトですぐに入手できる資料

や各種報道から得られる二次情報で研究テーマに関わる個別研究（共同研究会を7回開催）を進めるとともに、11月12日にはズームを用いて河田フェザー株式会社からSDGs推進に関する事例報告を頂くことができた。こうした研究活動を踏まえて以下の論考からなる報告書（全76頁）を作成した。

序 論	現代ファッションの消費と創造のあり方に作用する諸要因（富澤修身）
第1章	中小素材メーカー・河田フェザー株式会社にみる先進的SDGs達成推進活動について（大阪産学連携研究会）
第2章	株式会社FABRIC TOKYO（高山遼太）
第3章	ケリングのSDGsに向けての経営戦略（畑中艶子）
第4章	ケリングの環境損益計算書運用に関する効果や影響（藤井輝之）
第5章	CSO（Chief Sustainability Officer）とSDGsの関係に関する一考察（菅原正博）
第6章	ニューノーマル時代のSDGsについて（高原昌彦）
資料	SDGs達成進捗度測定シートについて（富澤修身）

2020年度の活動としてSDGsと万博に関する文献収集も限られた予算の範囲内ではあるが行うことができた。2021年度にはこれまで収集した文献と個別事例研究から得られた知見を取りまとめる作業を行いたい。加えて大阪・関西万博に関わる「いのち」をキーワードに、ファッションとファッション産業にできること、を問いたい。

【共同研究報告】

サステナブル社会の構築をめざした衣服選択研究

国際ファッション専門職大学
松岡依里子

【研究の目的】 本研究では、「SDGs」という地球規模の課題を、個人の「ワードローブ」（特にその「消費行動」の側面）と結びつける。人間の衣服に関する一連の行動には、衣服を選択し、所有（購入、借りる、共有など）により組み合わせを行い、着用し、評価され、廃棄（あるいは譲渡、寄付）するという流れが存在する。本研究では、家政学における衣生活の中の衣服選択過程に着目し、ワードローブ調査とファッション意識とライフスタイル調査を通して、その実態を明らかにし、サステナブル社会構築のための指南書を作成する。

【方法】 大学生と専門学校生及びスタイリスト、一般の方のワードローブ調査を行った。「着用していて好き」「着用しているが好きではない」「着用していないが好き」「着用せず好きでなくなった」のカテゴリー別に写真を提供してもらった。また、質問紙調査とインタビュー調査で、ライフスタイルとファッション志向性、ワードローブリサーチ後の感想などを記載してもらった。量的分析（多変量解析、AI分析）及び質的分析（テキストマイニング、インタビュー分析など）を行い、考察した。

【結果】 1) ファッションビジネス学会全国大会（2020年11月14日オンライン）口頭発表

「パーソナルスタイリング技術に関する一考察（松岡）」「ワードローブ分析による大学生の意識の変化——自己意識に着目して（古田）」「ワードローブ分析からみる衣服選択傾向（倉内）」

大学生のワードローブリサーチ結果から、アイテム傾向や色、デザインに関することと購買行動や廃棄行動に関する自己改善などの記載が多かった。また、ファッションに対する意識や好きなファッションイメージについては多様化しており、この意識の相違がワードローブの特徴と関係していた。

2) 日本感性工学会全国大会（2020年9月11日）にて「トレンドの要素を埋め込んだファッションレコメンドシステム——ソーシャルメディア等の組み込み」を発表（学外共同研究者 東京国際工科専門職大学教授大関和夫氏との共著）。本発表では、海外文献調査から、AIによる従来のレコメンドシステムについて整理し、分析モデルを考案した。
3) 2021年2月13日「一般公開研究会——私のクローゼットからはじまるニューノーマル時代のおしゃれサステナブル」を開催した（出席者66名）。

①学生ワードローブ発表2件

②講演1 キムラサオリ氏（株式会社NATURE 代表取締役 スタイリスト）

「パーソナルスタイリストのクローゼットマネジメントについて」

③講演2 齊藤孝浩氏（ダイヤモンドワークス）

「ファッションビジネスはマーケットインからクローゼットインへ——テクノロジーの進化が変える顧客満足の起点」

今回の研究会では、スタイリストの現状や業界での改善点についての示唆をえることができた。

第2回公開研究会ではAI分析とAIビジネスについての講演を予定している。